

實演童話

恵みの雨



對象兒童 尋常三年以上
講演時間 三十分

阿頼耶 順

(ことわり) 久しぶりで下宿のお寺で夕づきめを試み
した時香の煙が真すぐに立ち上つて氣持よくそのまゝ筆
をこつてズラ／＼と思ふまゝ書いて見ました。讀者諸氏
の實演をお願いします。

或る所に太郎と言ふ少年がありました。お父さんは貧
乏で僅かばかりの田畑を持つたお百姓でありました
植付けのすんだ苗田に一番大切なものは水ですが今年は
さうしたこもかちつも雨が降らないのでお百姓達は大
變困つてゐるのです。

今日も太郎は朝からお父さんの言ひつけでお家の田の
水を見て廻りましたが餘程つかれがひきかつたのでせう
田圃の畦に腰を下して休んで居る内にぐつすり寢込んで
しまひました。

太郎が大きな躰をかいてゐるこゝから來たのか突然
太郎の前に足を止めた老人がりましたが、大きな聲で
「太郎々々」こよぶ聲に太郎はふみ目を開けて見るこ此
のあたりでは見慣れない長い袖をつけたお爺さんが自分
の横に立つてゐるのに氣がつかました。

頭には白い頭巾をかぶり左の手には長い竹杖をついた
のが太郎の顔を見るこニコリ笑つて

「ごうだいづらいか」こ言ひました。

太郎はその顔を見るこ白い鬚の生えたやさしさうなお
爺さんですからすぐお友達のやうな氣になつてしまひま
した。

「ううんちつこもつかないや」

「でも眸から晩までそんなにして田の畦ばかり廻つて居
ては第一遊べもしないぢやないか」

「僕はねお父さんの仕事をしてゐるんですよ」

「そして雨が少しも降らないので困つてゐるんですよ。」

この田はお父さんの大事な身代なんです」

「面白い——」とお爺さんは底力のこもつた大きな聲で

言ひながら右手を伸して太郎の肩をつかまへました。

「面白いぞその心が尊いぞ。お前のお父さんもう子供をもつたものだわい」

「どうれ一つお前の爲めに雨を降らせてやらうかな」

言ひました。(雨を降らす。そんなことが出来るものかい)ミ

太郎は疑ひましたがお爺さんの顔を見上げるミお爺さんは眞面目な顔付きでした。

「どうれこの香を出して」ミお爺さんが帯の間にはさん

だ小さな紙包みを取り出して

「これは雨を降らすお香だよ」ミつまみ出したのを見ま

すミそれは灰の様な茶色の香でありました。

「お爺さんその香をどうするのだい」

「まあそこでだまつて見てゐるがい」

お爺さんはその香を地面の上に置き火打ち石を取り出してカチン／＼火をつけられるミその香は美しい紫の煙をふき出し始めました。そしてその煙からは何とも言へないいゝ薫がして來ました。太郎は

「お爺さんいゝ薫がして來ますね」ミ言ひますミ

「これはこのお香の薫だよ。それ上を見てごらん」

太郎はふいミ空を仰いで見るミその煙は眞すぐに頂度天

から糸をたらしした様に靜かにゆれり／＼ミゆれ上つてゐ

るのでした。太郎は今にこんなミこが起るかミじつミそ

の煙を見つめてゐますミやがてその煙の糸は上空で靜かに

横になびき始めましたそして大きな圓を畫き出すのでした。

「お爺さん煙が輪を書きましたよ」

「今に雨が降つて來るだらう」ミお爺さんが言はれた頃

燃えてゐた香はすっかりなくなりましたが上空で畫かれた大きな圓の中が次第に白くなり始めました。そして見る

見る内にその圓ははつきりした雲ミなり白い雲がにわか

かに黒くなつたミ思ふ間もなく大粒の雨が太郎の見上げ

てゐる顔の上にボツ／＼ミ落ちて來ました。

「あつお爺さん雨だよ」

「そうらひさくなるぞ」ミ太郎がお爺さんの衣の中にだ

きしめられた時にはそれはもう物凄い大雨ミなりました

太郎は小躍して喜んで居ましたがそれもつかの間、早くも雨は降り止み、さつきの雲は何處へ行つたやら大空はたゞ青々ミして影も形もありませんでした。太郎は呆氣にこられてほんやりしてゐましたが

「少ししか香を持つてゐなかつたからなあ」ミお爺さん

は言はれました。

「香さへ多くさんたけば　雨が降るのですか」

「さうだとも。家に歸ればいくらでもあるのだがなあ」
お爺さんの言葉を聞く太郎はもうじつじつして居られませんでした。

「お爺さんその香をもつと多くさん僕に呉れませんかそしてそれを頂いて雨を降らせてお父さんや世間の人を喜ばして上げたいなあ」

「さうか　いやぎれだけでも上げやう。取りにさへ呉れなば」

「一體お爺さんのお家と言ふのは何處ですか」

「そうれ」と言ひながら白い頭巾のお爺さんは目を上げて遙かに雲の上を指しました。

「あの上だあそこまで行くのだ」

「ほうー飛行機にでも乗らなきやこても行かれつこありやしないや」

「行くつもりなら面白いものに乗せてつれて行つてやらう」

「ほんとうですかお爺さんお願いしますそしてうんのあの香を下さい」

「さうかそれぢや先づ俺と一緒に來て見るがよい。では早速これへ乗つて一飛びに空を渡るこしやう」

お爺さんは左の手に持つた長い竹杖を取り上げるこ口

の中で何かしら分らないことを言ひ乍ら太郎と一緒にその杖へ馬にでも乗るやうに誇りました。するこ不思議。竹杖は忽ち龍のやうに勢よく大空や舞ひ上つて晴れ渡つた大空を雲の方角へこ飛んで行きました。

太郎を膽をつぶし乍ら恐る／＼下を見下しました。が下には唯青い山々がかすかに見えるばかりであの田や畑はさうに霞に紛れたのでせう。そこを探しても見當りません。お爺さんは白い鬚の毛を風に吹かせながら高らかに歌を唱ひ出しました。

人間忽々として衆務を營み年命の日夜に去る事を覺らす。

燈の風にきへなんここ期し難きが如し忙々たる六道足趣なし。

未だ解脱して苦海を出るを得ず何んぞ安然として警懼せざる。

二人を乗せた竹杖は間もなく天に舞ひ上りました。

「もう近いぞそれ洞が見えて來た」と指す方を見ますこそびえ立つ岩山の中に雲の柱にさゝえられて横に廣い洞穴があります。奥はぎの位ひあるかわかりませんが人ならば七八人も竝んで入れさうな間口の廣さ、その前まで來たと思つた時お爺さんは二人の誇つてゐた竹杖をはづして手に取りましたが太郎は早くも洞穴の中に立つて居るのでした。

「さあお前の注文通り一飛びに來たぞ」とお爺さんは先に立つてその洞穴の中に入り込みました。

穴の中には火がチロ／＼燃へて居ますがその火の光でよくあたりを見廻しますと洞の中程に大きな壺があるのが見えました。

「お爺さんあの壺の中にあるんですか」

「あゝさうだよ」言ひ乍らお爺さんは重さうにその壺を持つて來ましたが中を開けて見せませすゝその中には一ぱいの香が入つてゐました。

「これをみんなやつてもいいのだが、若しうっかりこれを一度に燃したらそれこそ取り代へしのつかぬことになるからなあ」

「一體どんなことになるのですか」

「これを一度に燃やしたなら——大雨になつて家は流れ田は流れ生き物も人間も山も川も何もかも流されてしまふだらうからなあ——はつはつはつ」大きく笑ひ乍らお爺さんは両手に一ぱいの香を太郎に渡されました。

「これだけあれば田が實り畑が育つに充分の雨が降らうからなあ」

「さあ持つてお歸り。あゝさう／＼途中で落しては何にもならないから此布に包むのだそーれ」とお爺さんは親切に太郎に首にしつかり白い布を結び付けてやりました「お爺さん有難う」

「ぢやしつかりお歸り」

お爺さんは太郎を竹杖に乗せるゝ又口の中で何かさなへました。

太郎を乗せた竹杖は前よりもつゝ物凄く速さで下界へ下り始めました。太郎は目も廻らんばかりです。さうして下を見るひまがありません。兩手でしつかり竹杖を握りしめたまゝ目をつむつて居ました。

風のため兩方の耳はウーン／＼こうなりを立てゝゐる外には何も聞えませんでした。が急に下りが遅くなつたかと思ふと早や太郎の足は地の上に着いて居ました。

下りた所はついさつき天へ上るまでお爺さん話してゐた自分のお家の田の畦でした。

太郎はほつゝ胸を撫ましたが一時も早く香を燃いて雨を降らし人々を喜ばさなければならぬと首にしつかり結びつけられた白い布をひもごき香を出して火をつけました。香は物凄く煙をはき出して燃へ上りました。眞すぐに天へ天へ上りました。

がさうしたところか今の煙はたゞ上へ上へさ上るばかりでいつまでたつても圓を畫きませんしそれらしい雲すらも出來てこないのです。

(どうしたのだらう香が足りないのか知ら)

太郎は心配でなりません。香をさ／＼燃きました。然しやはり雲は出來ませんし小雨も降りませんで

した。

太郎は餘りの悲しさにさうく泣き出してしまひました。なまけなさに大きな涙がほゝを傳つてボロ／＼こぼれ落ちました。

涙の中で太郎は天を仰いで叫びました。

「お爺さん／＼　ちつとも雨が降らないんだよ」

その哀れな聲が天のおぢさんにこゝいたのでせう。天の一角から大きな聲がひびいて來ました。

「おーい太郎や教へるのを忘れたがその香はみ佛さまのお香だよ。お願いしなきゃ降らないぞ」

よまぎれもなく其聲は白い頭巾のおぢさんの聲でした。太郎は兩手をしつかり合せました。一時も早く恵みの雨を下さい／＼お願いしました。水がなくて困つて居るお百姓をお助け下さい／＼お願いしました。

兩手を合せたまゝぢつ／＼涙の目で空を仰いで居る太郎の顔に急に喜びの色が浮び出るのです。

太郎の目に入つたものは何處かへ行つてしまつた筈の香の煙が次第に浮き出たかと思ふ／＼あのおぢさんが燃した時の様に煙の糸／＼なつて空の上でなびき出し靜かに圓を畫き出しました。

その煙の輪はおぢさんの時の二倍になり五倍になり十倍もの大きさになつてやがてその輪は雲／＼なり空一面をおほてしまひました。

そしてその雲の中からはかすかに雷の音さへも聞え始めましたが、あたりは早や槍の様な大雨／＼になりました。此のすさまじい雨は田や畑を流してしまふかと思はれました。

人々は喜びました。みんな簑笠にしつかり蹴をかついで我家の田へ／＼急ぎ出ました。

田に出て見る／＼この大雨に打たれて身體がズツクリになつてゐながら何にも知らずに眠つてゐる一人の子供がありました。

「おゝ太郎さんぢやないか。こんなひびい雨の中で寢て居る／＼は」／＼起こされてはつ／＼氣がついて見る太郎は田の畦に今まで眠つてゐたのです。

太郎はきつ／＼お父さんの言ひついで鉄をかついで田の水を見に來たまゝつかれの爲めにぐ／＼すり寢込んでしまつて居て、不思議なおぢさんの夢を見て居たのです。

おぢさんによび起された太郎は「はつ」／＼叫びはね起きるなり。

「おぢさんこの雨は、この雨は、み佛様の恵みの雨だよ」
「おゝさうだ／＼、この雨こそ佛さまが下されたお恵みの雨だ／＼。ありがた／＼」／＼おぢさんは言ひました。人々もみな恵みの雨だ／＼言ひ合つて喜びました。

苗田は喜びの色を浮べて靜かになびいておりました。